

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUJIBAKU

2017. 1 No.91

トピックス

平成28年度特別展の開催
第110回 文化財めぐり
寄贈資料のご紹介
博物館実習生、中学生の職場体験

研究ノート

津山城下の
変わった形の墓標 小島 徹

お知らせ

江戸一目図屏風の実物展示
「津山松平藩町奉行日記」の
バックナンバー公開



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum



平成28年度特別展を開催しました 行列を組む武士たち

——津山藩松平家の行列図より——

10/8
～
11/20

昨年秋の特別展は、当館にある津山藩松平家伝来の大名行列図を全て展示する目的で、「行列を組む武士たち」というテーマを立てて開催しました。

江戸時代の支配階層である武士たちは、移動や旅の時に行列を組んで進みましたが、この行列は、その主人の武威や格式を体現したものであり、単なる行進ではありません。そのため、供の人数や持たせる道具の構成などに細かい決まりがあり、その決まりの中でできる限り立派に見せようと競い合うこともありました。

本展では、松平家に伝わった各種の行列図のほか、乗物や熊毛槍など行列に用いられたさまざまな道具類を合わせて紹介し、武士の行列を通して江戸時代の社会のありようを概観しました。

特に、松平家が10万石に復帰した直後の入国行列図は、横長のふすま7枚に仕立てられた、全長13メートルを超える巨大なものです。津山市庁舎の市長応接室の壁紙に利用されていますが、大名行列の詳細を視覚的に把握できる貴重な資料として注目され、テレビ番組や歴史雑誌でも

画像がよく紹介されます。あまりに大きいため当館でも展示が難しく、全ての展示は平成19年以來2回目のことです。ご覧になった皆様には、その迫力を感じ取っていただけたのではないのでしょうか。

また、松平家伝来の火消用の纏を初公開したほか、同じく松平家に伝わり藩主が用いた乗物も数年ぶりに展示しました。行列図に描かれた資料の実物を一緒に見ることで、歴史への関心や理解も深まったものと思います。本展の開催にご協力くださった方々や会期中に当館へお出でになられた皆様に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



※特別展の図録には、今回展示した行列図の全画像を網羅して掲載しています。興味のある方は、ぜひお買い求めください。当館受付にて1冊1,000円で販売しています。

特別展関連事業 第110回文化財めぐり 「出雲街道を歩く(河辺～津山城下)」

10月29日

今回の文化財めぐりは、特別展「行列を組む武士たち」の関連事業として開催しました。特別展の展示資料に、津山藩主の参勤交代の様子を描いた行列図がありますが、津山藩主の参勤交代には出雲街道が使われました。その出雲街道を、河辺から津山城下まで実際に歩いてみようというものです。

友の会会員だけでなく一般市民の皆さんにもご案内したところ、32名の方が参加されました。当日は薄曇りで時折強い風に吹かれてましたが、おおむね穏やかな天候でした。史跡などの要所では、当館職員が簡単に解説をしながら、約4.7キロの道のりを無事に歩き終えました。出発地点の河边上之町では、地元の末沢敏男さんから、ご所蔵の街道絵図の写しを見せていただきながら、詳しいご説明をいただきました。

短い距離ではありましたが、実際に歩いてみることで、参勤交代や当時の旅の苦勞に思いをめぐらすひと時になったのではないのでしょうか。参加者の皆様、どうもありがとうございました。



川崎にて

西新町にて



今回のコース

寄贈作品のご紹介



國米弘子画
「Landscape0822 (回想の風景A)」

津山ゆかりの画家國米弘子氏から第10回日本・フランス現代美術世界展でマイメリ社賞を受賞した「Landscape0822 (回想の風景A)」を寄贈いただきました。

また、津山市在住の木芸作家で日本工芸会正会員の太田史朗氏から第14回伝統工芸木竹展で入選した「黒柿造拭漆短冊箱」を寄贈いただきました。



太田史朗作「黒柿造拭漆短冊箱」

中学生の職場体験を受け入れました

11月9日から11日までの3日間、北陵中学2年生2人を受け入れました。資料発送準備などの事務作業や和綴本の修復作業など、博物館業務の一部を体験してもらいました。



みんな
よく頑張って
くれました

博物館キャラクター
お
「パルフェ」

博物館実習生を受け入れました

8月2日から9日まで、博物館実習生を2人受け入れました。博物館実習は、学芸員資格取得のために必要な科目の一つです。

今年度は、夏休みの子供向け講座、特別展用の写真撮影や資料整理など、学芸員として必要な知識を得られるように、博物館の様々な業務を手伝ってもらいました。



津山城下の変わった形の墓標

はじめに (墓標の変遷)

墓標といえは、石造の四角柱のものを思い浮かべる人が多いと思います。現代では、故人の生前の趣味・嗜好に関わりの深い物をかたどった墓標もよく見られるようになりました。近年では墓を立てないとか、あつても入らずに散骨や樹木葬などの自然葬を選択する人が増えているとも言われます。

そもそも墓標とは、死者の遺体を埋葬した土地の上に立てる一種の標識、つまり「墓じるし」です。墓碑という言葉もありますが、これはもともと墓の側や前に立てられるもので、厳密には墓標とは区別されるべきものです。現代ではほぼ同義の語として一般に通用しています。

現代の墓標の起源は、死者の供養のために立てられた仏教的な供養塔であり、中世初め頃の石造の卒塔婆^{そとぼ}や五輪塔にさかのぼると言います。その後、宝篋印塔や多宝塔のものも現れますが、近世に入つて庶民の墓にも石塔が立てられるようになると、板状の石卒塔婆型が主流となります。そして、その頭頂部は三角に尖った形から円くなり、板状の薄いものから分厚い角柱型へと変化する過程で、仏を表す梵字や法名の表記から単に俗名のみを表記へと変わるなど、仏教的な供養塔の

要素が消え失せて、代わりに死者個人の顕彰・記念碑的な性格が強まり、四角柱の石に「〇〇之墓」と刻む墓標が一般的となり現代に至っています(以上、斎藤忠著『墳墓』1978年・近藤出版社、土井卓治著『葬送と墓の民俗』1997年・岩田書院を参照)。

冒頭で触れたような、いわゆる四角柱型でない独自形式の墓標は、ごく最近の流行のように思っていたのですが、墓標を独特の形にしようという試みは、どうも早くからあつたようです。筆者が最近存在を知った、変わった形の墓標を紹介します。

小泉正発夫婦の墓標

この墓標(写真1)は、津山市小田中の本源寺の境内墓地にあるもので、小泉正発夫婦の墓標です。旧津山藩士のある家を調査する必要から、本源寺の華山住職に墓地をご案内いただいた時に「実はこんなお墓があるのを見てもらえませんか」と紹介されました。円筒の側面のやや下寄り外に膨らみ上下が次第に細くなつていて、紡錘形と表現されるような、とても不思議な形をしています。いったい、これは何なのでしょう?

まず、被葬者について確認しておきましょう。本源寺といえは、津山藩主森家の墓所として有名ですが、その後

の松平家家臣の菩提寺でもありました。この小泉家もそうした家の一つです。墓標の前には夫婦二人の法名が、背面上部には「小泉正発夫婦」と刻まれ、その下に二人の没年月日らしき日付が二行にわたつて彫られています。どちらが誰の没年月日か明記されていませんが、津山藩士の「勤書」で小泉家を調べると、小泉兵衛という人物が天保2年(1831)9月22日に死去しており、この墓標の背面右の日付と一致します。おそらく兵衛は通称で、墓に刻まれた正発が諱に当たるのでしょう。左の日付(弘化2年「1845」正月17日)は妻の没年月日で、妻の没後に夫婦墓として立てられたであろうことがわかります。

14年(1817)5月5日から文政7年(1824)8月21日まで、大和流の弓術師役を務めています。筆者も学生時代に弓道を嗜んでいたため、気付くところがありました。ひょっとすると、この墓標は、鏑^{やぶ}をかたどっているのではなからうか、と。

鏑とは、矢の先端に取り付けて用いるものです。形は特に決まっていりませんが、おおよそ円筒形または紡錘形で、数か所に穴が開いていて、これを取り付けた矢を鏑矢と言います。鏑矢を弓につがえて放つと、ヒューというような音が鳴ります。そのため、戦闘開始の合図とされたり、その音に魔物をはらう力があると考えられ、さまざまな儀式における魔除けに用いられたりしました。

小島 徹



写真1: 小泉正発夫婦の墓標

(本源寺境内)

前面の銘文: 一陽軒天道宗奇居士
瑞雲院祥室阿慶大姉

背面の銘文:

小泉正発夫婦 天保二辛卯年九月廿二日
弘化二乙巳年正月十七日

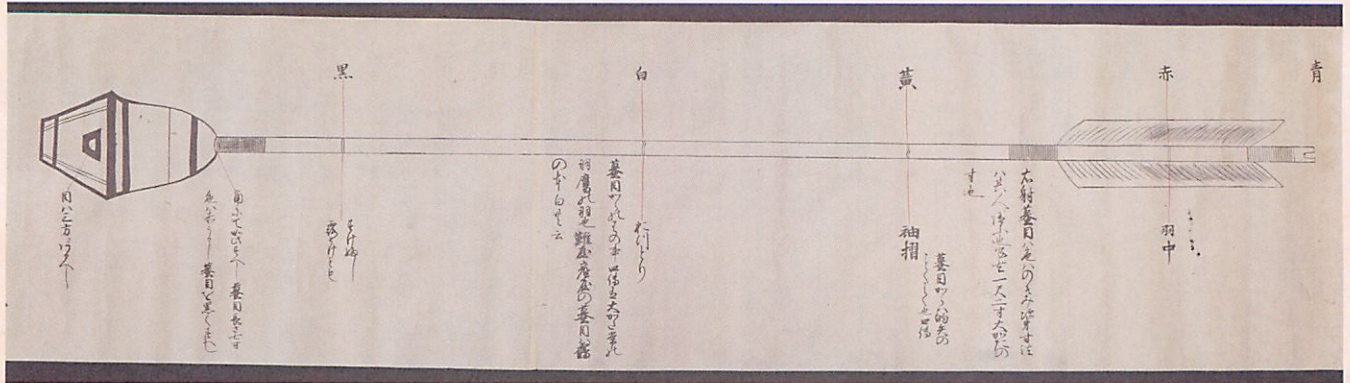


写真2：鐃矢の図解（当館蔵 土岐家資料内）



写真3：墓標下部の彫り込み

小泉家と同じく松平家の家臣で、印西派の弓術師役を2代務めた土岐家に伝わる弓術関係資料（当館蔵）の中に、鐃矢を図解した絵（写真2）があります。その絵の鐃と、小泉兵衛正発の墓標を見比べると、よく似た形であることがわかります。この墓標を注意深く観察すると、下部に四角い彫り込み（写真3）が見られ、これは鐃に開けられた穴の表現であると考えられます。

すなわち、この墓標の形は、故人の特技であった弓術にちなんで選ばれたものなのです。墓標には、立てられた日付がありませんが、もしも夫婦がこの世を去ってから数年のうちに立てられたのだとすれば、江戸時代のうちにできた独自形式の墓標ということになります。

その他の独自形式の墓標

では、江戸時代の墓標で他に独自形式のものはないのでしょうか？ 今ところ、筆者が津山城下で確認しているのは、次のとおりです。

①千光寺境内の山田家墓標（写真4）

石で酒樽をかたどって彫り出したもの。被葬者は、ともに宝暦年間に亡くなった山田氏夫婦。円い墓標の側面に刻まれた銘文によると、夫はたいそう酒好きであったようで、その13回忌に夫婦の子供が立てたとのこと。



写真4：山田氏夫婦の墓標（千光寺境内）

②同寺境内の本多家墓標（写真5）

剣か槍をかたどったような形で青銅製。台石も一番上は六角形で、その中央から伸びた細い円柱と円板の上に、剣先が載るもの。被葬者は本多監物重威で、幕末に活躍した松平家の重臣。剣術や槍術に秀でていたと想像されますが、詳細な経歴は不明。なお、背面に百濟助順という鑄造者名があり、津山で名の通った鑄物師が手掛けたことがわかります。



写真5：本多監物重威の墓標（千光寺境内）

③長安寺境内の正木家墓標（写真6）

平たい自然石を台石とし、台形の鉄の台の上に、不等辺七角形の鉄製の板が載るもの。板の前面の周囲には雷紋が施され、鉄の台の前面には、波濤と2頭の龍が浮き彫りにされています。被葬者は松平家の家臣で、兵学者ながら美作の地誌「東作誌」を編集するなど文才に優れた正木兵馬輝雄。何をかたどっているのかよくわからない、非常に不思議な形の墓標です。



写真6：正木兵馬輝雄の墓標（長安寺境内）



写真9：村山東夫婦の墓標
(長安寺境内)

村山東は、幕末（1856～）に大和流の師役を務めた人物で、その当時は九郎左衛門と名乗り、明治維新以降に東と改名したようです。墓標の側面に夫婦それぞれの略歴が刻まれ、弓術師役のことも触れています。



写真8：柴山遊翁夫婦の墓標
(成道寺境内)

柴山家も古い墓標は全て寄せ集められています。中の方は銘文の確認ができないのですが、たまたま端にあった墓標の側面に「柴山遊翁」の名を読み取れました（前から2列目左端）。これは、文政～天保年間（1819～39）に印西派師役を務めた柴山勇記の隠居後の号です。



写真7：土岐家の墓標群
(本源寺境内)

土岐家の幕末以前の墓標は墓域の隅に寄せ集められています。このうち、右から3番目が三太左衛門、4番目が半左衛門のものと思われます。この2人は親子で、寛延～文化年間（1748～1810）の長きにわたり、2代続けて印西派の弓術師役を務めています。

他の弓術師役の墓標

それから、松平家の家臣であれば菩提寺がわかるので、他の弓術師役の墓標も気にして調べているのですが、移転したり無縁状態で寄せ墓あるいは撤去されたりしているのか、弓術師役全21名のうち、今のところ小泉兵衛を含めて4家5名しか確認できていません（小泉以外の墓標は写真7、9）。引き続き調べるつもりですが、旧藩士族で今なお津山に居住している家は、全体からすればごくわずかと思われそうですので、これ以上の確認は難しいかもしれません。

現時点で確認済みの墓標はいずれも、その当時よく立てられた一般的な形式であり、小泉兵衛のように弓具をかたどった墓標は他に見られません。

禁令と墓標の形への意識

墓標の形は、おおまかには「はじめに」で紹介したような変遷をたどるのですが、もちろん地域差や身分による差異もあります。今のところ、墓標の形そのものを制限するような禁令の存在は確認していませんが、天保2年（1831）4月に幕府が出した触書では、百姓・町人が身分不相応の大掛かりな葬儀を営み壮大な墓標を立て、法名に院号・居士号を付けるのを禁じています（『御触書天保集成』五五五二番文書）。この触書の中に、形の制限に関する文言がないのは、どのような形の墓標でも自由に立ててよかつたのではなく、むしろ当時の一般的

な形式にのっとって立てるのが当然と考えられ、独自の形を選ぶことなど想定していないと見るべきでしょう。

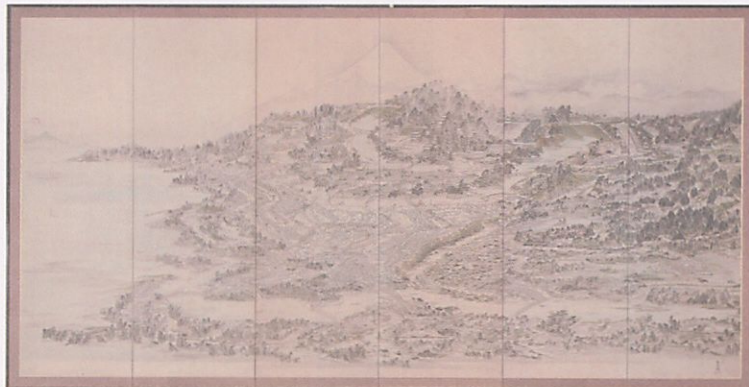
また、「はじめに」で確認したとおり、外形が変化するに従って仏教的な要素が失われていく墓標ですが、それでもやはり墓標を立てる目的は死者の供養以外の何物でもありません。現代であれば、故人の好きな物をかたどった墓標が死者の供養につながるという考えも尊重されますが、江戸時代は死者の葬送・供養に関する風習・習俗も今以上に厳密だったはずであり、そのようなしきたりを破ることにかなりの抵抗があったものと思われる。江戸時代に立てられた独自形式の墓標を見る際、そうした時代背景への考慮を欠かしてはならないと考えます。

ご教示をそつゝむすびに代えて

以上、偶然に出会った鎗型の墓標を紹介しながら、墓標の形について若干の考察を加えてきました。結局、独自形式の墓標はいつ、どのようなきっかけで出現するようになるのか、非常に興味を引く問題ではありますが、管見では全く手掛かりが見えない状況です。そこで、この件に関する情報を広く集めたいと思います。ご近所で見掛けた独自形式の墓標の情報でも、参考文献のご教示でも、何でも結構です（ただし、墓標は江戸・明治初期に限ります）。筆者までお知らせくださるようお願いして、むすびとします。

江戸一目図屏風の実物を展示します

江戸一目図屏風の実物を4月1日(土)～5月7日(日)の日程で展示いたします。みなさまどうぞ足をお運びください。



当館で刊行しております 「津山松平藩町奉行日記」バックナンバーを ホームページで公開しています

ご好評をいただいております「津山松平藩町奉行日記」ですが、バックナンバーの売り切れ等もあり、みなさまにはご迷惑をおかけしております。そこで、バックナンバーにつきましては、当館のホームページで公開をすることになりました。

当館ホームページの「お知らせ」の中の町奉行日記公開についての記事をクリックいただくと該当のページに移動します。



博物館だより「つはく」
No.91 平成29年1月1日



【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp

【印刷】有限会社 弘文社

入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00

【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始(12月29日～1月3日)・その他

【入館料】一般…200円(30人以上の団体の場合160円)

高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。

土は、津山松平藩の槍印で剣大といい、現在津山市の市章となっています。